A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI

TOSABUSHI

とさぶし

高知県は、ひとつの大家族です。

高知家

No 46

kochi 再発見 discovery 新発見

TAKE FREE

高知人がつむぐ 映画愛

高知人がつむぐ映画愛

今回の特集は、「高知人がつむぐ映画愛」。映画が娯楽の中心にあった昭和の時代から始まり、今はなき地方の映画館の記憶や、若き映画ファンが自主上映活動で情熱を燃やし、映画好きな風土が育まれた時代を振り返ります。そして、高知の映画文化の「今」につながるさまざまな映画館を訪れ、高知の映画文化に迫ります。

昭和30年〜40年代

150を超える映画館があった！

戦後、日本では映画産業が栄えた。最盛期には、高知県内に150を超える映画館があり、都会に劣らないほど上映が盛んだった。

“あの頃、映画は最大の娯楽だった”

室戸市浮津、現在の「東町商店街」界隈にあった中央館（写真は昭和31年のもの）。大手配給会社の作品を上映していた。収容できる観客数は500人と、近代的な劇場だった。

昭和32年頃の街の光景。映画館の前の通りは、漁師や学生といった地元の人たちで溢れかえっていた。

室戸市 マグロ漁師も通った

中央館

昭和10年頃～35年頃

映画と暮らしが近かった昭和中期の港町の光景

時代は、映画興行の最盛期。マグロ漁が盛んになり、たくさんの漁師たちでにぎわっていた当時の室戸市にも、いくつもの映画館があった。その頃を地元の女学生として過ごした堺さんは、「吉良川町や佐喜浜町といった、海沿いの小さな町にまで映画館がありましたね」と当時を語る。中でも市街地にあった「中央館」と「東劇」は、まさに街の娯楽の中心。そこでは全国的な配給会社が手がける映画が上映されており、街の誰もが新しい映画を心待ちにしていたそう。「公開日が近づくと、街中に手描きのポスターが貼られてわくわくしましたね」。漁を終えて沖から戻ってきた漁師たちが、その足で映画を見に行くことも日常の風景だったという。

一方で、「当時の子どもたちが映画を見ることは教育上制限されていたんです」とも。好きな映画を自由に鑑賞できるのは高校生になってからで、小中学生は学校や保護者が関わる教育団体が推薦する特定の映画を生徒全員で見る「団体観賞」で映画に触れていたのだとか。その他にも「商店に貼られている映画のポスターを譲ってもらえると、それが映画の割引券になった」など、映画が暮らしに根付いた、ユニークなローカルルールがあったそうだ。

中央館の前で開場を待つ人たち。入り口には鑑賞料を入れるドラム缶が置かれていたそう。

当時を語ってくれた

堺 喜久美さん

昭和20年生まれ。「室戸市観光ガイドの会」の会長として観光ガイドも務めている。

山間の村で、映画は希望になった

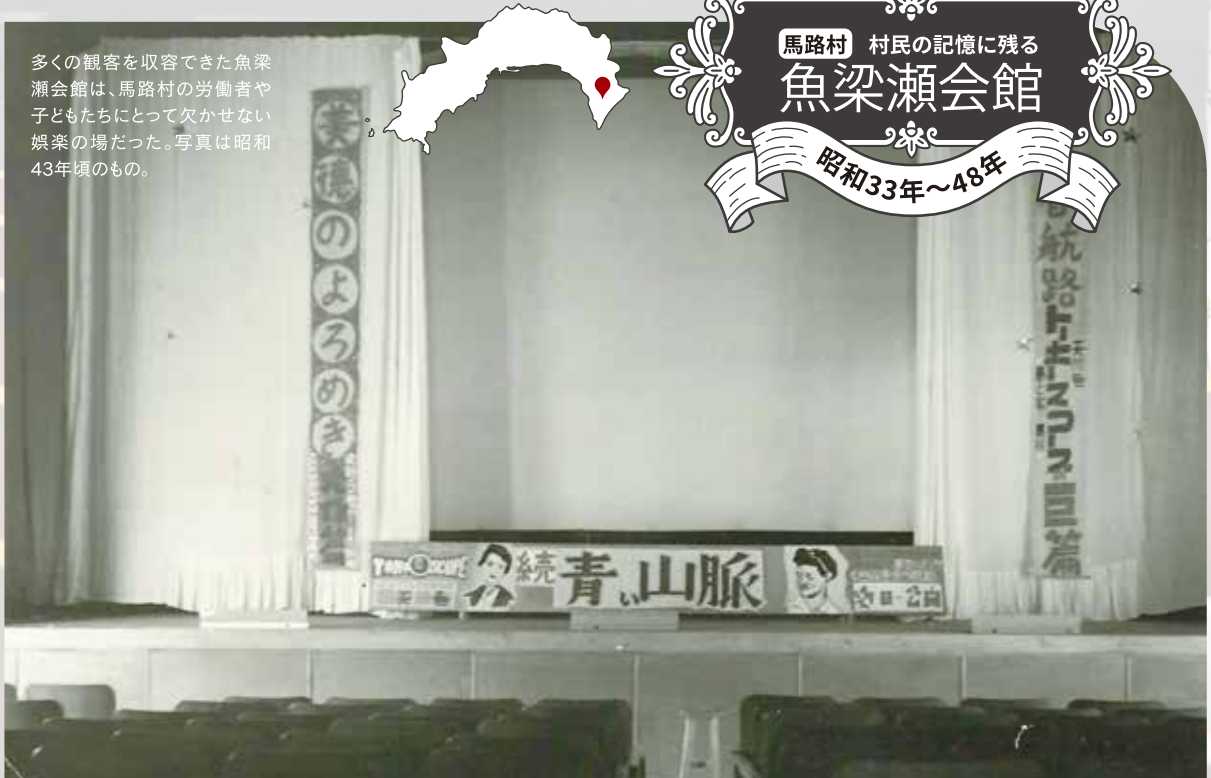
馬路村の娯楽と生きがいを支え続けた映画館

「映画館に出かける人たちのために、よく貸切の森林鉄道が走ったもんです」と話すのは、馬路村魚梁瀬（やなせ）地域で暮らしてきた井上さん。昭和の前期に盛んだった高知県の林業でまさに中心地となっていた魚梁瀬は、山あいの村とは思えないほどハイカラな雰囲気だったそうで、それを演出していた場所こそが映画館だった。井上さんの父親もまた、映画館を経営していたという。

転機となったのは、「魚梁瀬ダム」の建設だ。昭和32年には、さらに森林鉄道の廃線も決まるなど、時代が移り変わる中で、馬路村の映画館も姿を消していった。しかし、映画をこよなく愛していた井上さんは、父親の跡を継ごうと、映画館「魚梁瀬会館」の再開を決意。同じくダム建設を題材にした映画「黒部の太陽」（昭和43年公開）を興行すると、これが村民たちの間で一躍人気となり、村を元気づけたという。フィルム映画の衰退と共に魚梁瀬会館はその役割を終えたが、村に娯楽や希望を与え続けた劇場の記憶は、村民の心に残り続けている。

「魚梁瀬会館」はダム建設のため一度水没するも、昭和43年に新設され、興行を再開した。

魚梁瀬会館を経営していた
井上 洸士郎（いのうえ こうしろう）さん
昭和21年、馬路村生まれ。当時、高知県内の映画館にくまなく通ったほどの映画好き。「集落活動センターやなせ」所長。



多くの観客を収容できた魚梁瀬会館は、馬路村の労働者や子どもたちにとって欠かせない娯楽の場だった。写真は昭和43年頃のもの。

馬路村 村民の記憶に残る
魚梁瀬会館
昭和33年～48年

映画の公開に合わせて、レトロタッチな看板を制作。昭和の時代は多くの映画館で手描き看板が掲げられた。

フィルムの映画を上映する際も、音響は最新のドルビーサラウンドを使用するなど、視聴環境を整えている。映写機は小松さんが自ら操作している。

安田町 現役の昭和レトロ劇場

大心劇場

昭和29年～

“映画館の浪漫はまだまだ終わらない”

浪漫が溢れていたあの頃の映画館を今も

清流・安田川が流れ、穏やかな田んぼの景色が広がる安田町の里山に、今も現役の映画館「大心劇場」がある。昭和レトロな雰囲気が「エモい」と言われる昨今、ネットやSNSで話題になることもあるこの劇場で、支配人を務めている小松さん。こだわりは、商業施設のシネコン（複合映画館）には真似できないような、「昔ながらの映画館ならではの浪漫」だ。全国から集めた昭和映画のポスターを壁一面に貼ったり、映画看板を自ら手描きで制作したり。「面白いもので、鑑賞する空間をどう演出するかで、映画の見え方も変わってくる」と笑う。独自の路線を行くのは、同じく映画館を営んでいた父親の背中を見ていたから。「生まれてからずっと身近にあった、父の劇場にある浪漫を無くしたくなくて」。

フィルムからデジタルへ、小さなシアターからシネコンへと映画業界が変わっていく中、フィルム映画を扱い続けている大心劇場。「いつの時代も、わざわざ足を運んできてくれるお客さんとの出会いは嬉しいものですね」と話してくれた。

大心劇場 支配人

小松（こまつ） 秀吉（しゅうきち）さん

昭和27年、安田町生まれ。昭和49年、父親が営む「大心劇場（元中山映劇）」を継ぐ。ミュージシャン「豆電球」としても活動。

“家族ぐるみで繋いできた老舗映画館”

70年続く街の名物シアター 高知ゆかりの映画も応援

高知市 今も残る街の映画館

高知あたご劇場

昭和30年～

劇場があるのは愛宕商店街から東へ入ってすぐの場所。年季の入った木造モルタル造の建物。

ロビーでは、スナックやドリンク、パンフレットの販売も。話し声が中に聞こえるため「上映中はお静かに」がお約束。

「高知あたご劇場」は、地元の映画ファンなら誰もがその名を知る老舗シアター。創業は昭和30年。およそ70年にわたって、家族ぐるみで上映を続けてきた。現在の館主である水田サリーさんも、前館長だった水田朝雄（みずたあさお）さんの親族だ。「私が結婚した頃は、お義父さんはもちろん、お義母さんも親戚のおじさんも一緒に劇場で働いていましたね」と当時を振り返る。また、支配人の西川さんも劇場との付き合いはとても長く、学生時代から足繁く通っていたそう。「当時からチラシや割引券も手作りで。劇場を身近に感じて育ちましたね」。そんな地域に密着した劇場らしく、高知あたご劇場では、高知にゆかりがある映画作品の上映や舞台挨拶が積極的に行われている。近年では、香南市出身の映画プロデューサー、濱口典子（はまぐちみちこ）さんが手がけた映画「レッドシューズ」の舞台挨拶も話題になった。サリーさんは「家族や仲間で大切に続けてきた劇場。若い人たちの世代にも受け継いでいきたい」と話す。

高知あたご劇場　館主　支配人

水田 敦己（みずた あつき）さん、水田 サリー（みずた）さん、西川 泉（にしがわ いずみ）さん

サリーさんは昭和54年、インドネシア生まれ。先代の水田朝雄さんの弟の妻にあたる。西川さんは昭和46年、南国市生まれ。映写やもぎりなど、劇場の仕事全般を担う。この日は、サリーさんの息子、敦己さんも駆けつけてくれた。

座席数は1階と2階合わせて136席。2階席がある映画館は今では珍しい。

高知で撮られた名画

風景と人間ドラマがかなり濃い!?

さまざまな映画でロケ地や作品の舞台になった高知県。地元住民だから分かる、感慨深いシーンも!? 昭和、平成、令和、それぞれの時代に撮影された映画を、思い入れを持つ県民の声と合わせて紹介します。

祭りの準備 (昭和50年 ©東宝)

当時の高知県中村市(現四万十市)を舞台に、シナリオライターを夢見る若き青年たちの深い青春群像劇を描いた名画。脚本は、原作者で同地で育った中島丈博が務めた。

『祭りの準備』
BD＆DVD発売中
発売・販売:
キングレコード

夢を持つことをあきらめた人間に「祭り」は訪れない

「祭りの準備」に出会ったのは東京で不安な浪人生活を送っていた頃。「しっかりしろ」と思いっきり頬を張られたような衝撃でした。故郷のしがらみを断ち切って旅立つ主人公に自分が重なり、窪川駅で原田芳雄演じる中島利広にバンザイで送り出されるラストシーンでは涙が止まりませんでした。大学で自主映画制作に没頭し、放送局に職を得たのも、この映画が一つのきっかけだったかもしれません。公開から半世紀近く経ちますが、私にとって「祭りの準備」は色あせることのない永遠の青春映画です。

小松 健(こまつけん)さん
高知市／株式会社エフエム高知 代表取締役社長

エキストラとして映画に参加！今も色あせない思い出に

撮影当時、役場の方から「エキストラを募集していて、映画に参加できるかも」と聞いたのは、今からおよそ14年前のこと。主演の菅野美穂さんにも会いましたし、なんと私が営んでいる焼肉店まで、映画のロケ地になったんです。宿毛駅には今でも映画の立ち看板があって、色あせない思い出です。

金澤 暁美(かなざわあけみ)さん
宿毛市／焼肉かなざわ 店主

パーマネント野ばら

(平成22年 © 2010映画「パーマネント野ばら」製作委員会)

片田舎の漁村にある美容院「パーマネント野ばら」。離婚や孤独を経験しながら、たくましく生きる女性たちのドラマが繰り広げられる。高知県宿毛市がロケ地になった。

「パーマネント野ばら」DVD発売中
発売元:フルモテルモ/ショウゲート　販売元:アミューズソフト

宇宙人のあいつ

(令和5年 ©映画「宇宙人のあいつ」製作委員会)

兄弟のひとりになりすまして暮らしてきた宇宙人が、地球を離れることになった最後の3日間、家族のために奮闘するヒューマンドラマ。

高知の景色だからこそ撮れた色濃いファミリードラマ

監督の飯塚健さんをロケハンにお誘いしたことが、この映画が高知で撮影されるきっかけになりました。コメディでありファミリードラマでもある物語の一方、宇宙人が登場するという壮大さもあって、まさに高知の景色がぴったりとはまりました。たくさんの地元の皆さんにご協力を頂いた作品です。

古味 竜一(こみりゅういち)さん
高知市／映画プロデューサー

高知の映画文化に詳しい
山本 嘉博（やまもと よしひろ）さん
昭和33年、高知市生まれ。昭和55年に高知県に入庁し、平成5年には高知県立美術館の立ち上げにも携わる。著書に「高知の自主上映から」（発行：映画新聞）。

高知県立美術館 館長
藤田 直義（ふじた なおよし）さん
昭和30年、高知市生まれ。大学卒業後、高知にUターン。四国銀行に勤務しながら、自主上映活動に参加。やがて高知県立美術館に移り、平成19年、現職に就任。

見たい映画
見られるべき映画を
高知に橋渡しする

当時を振り返る2人。当時は「次はこの映画を見たい、この映画も見たい」と、上映会の活動そのものが面白かったと話す。

昭和50年～平成10年代
高知で自主上映活動が盛んに！
興行優先ではない、多様な映画を上映する活動が高知で盛り上がる。自主上映活動は全国的なブームでもあった。

上映会で高知に映画を！

映像文化の中心が映画館からテレビへと移り変わってゆく時代、高知で上映される映画の本数は下火に。そんな中「高知にもっと映画を持ってこよう！」と、自主上映活動に奔走する若者たちがいた。

個性を尊重する鑑賞会からいくつもの上映活動が生まれていった

「高知は全国的に見ても自主上映活動が盛んだ」と言われる。その理由を教えてくれるのは、当時の上映活動の中心にあった「高知映画鑑賞会」に参加していた、藤田さんと山本さんだ。「都会の大学を卒業して帰ってきたら、高知では見られる映画が少なくて。上映会を頻繁にやってたのは、要するに、自分たちがもっと映画を見たかったからだね（笑）」。その情熱は、都会と地方の文化的なギャップを埋める活動そのものだ。高知映画鑑賞会では、活動を牽引した川崎康為（かわさきやすい）さんが上映会のノウハウを仲間たちに開放し、それぞれの個性を尊重したことから、さらに多くの自主上映会を生んでいった。

“だって好きな映画は違うから”

県内の地域ごとに特色ある上映会を開催した「高知あだたん映画祭」も、近年で注目すべき上映活動。多様な映像表現を体験できる。

高知のオフシアターの自由な精神は県立美術館の中にも受け継がれた

「B級映画とか前衛映画とか、作家性が強いもの、オシャレで都会的なもの…。上映団体ごとに嗜好が違って、いろいろな映画が高知で見られるようになった」と山本さん。地元に映画好きの風土を育むことはもちろん、それぞれの上映会の主催者たちが、違った個性を持ちながらも高知映画鑑賞会でつながり続けたことは、いかにも高知人らしい。

また、高知の自主上映活動が、例えば都会のように、常設されるミニシアターの設立に向かわなかったことも、高知らしい展開だと山本さんは指摘する。その代わりに進めたのは「公共上映」という考え方に基づく文化行政への進展だ。

平成6年に、当時開館したばかりの高知県立美術館に、企画担当として藤田さんが就任。市民の自主上映活動のノウハウが公共施設に入っていった。「映画は地域の芸術文化を高めてくれるもの。それを支えるのは公共事業の役割だと考えて」と藤田さん。以来、高知県立美術館では、積極的に映画をアートとして扱い、映画監督の特集上映会や、地域の上映会と連動する映画祭を展開。その活動は、まるで映画館さながら。藤田さんは「近年では、海外の権利元と上映権の直接交渉に取り組み始めており、今後上映する作品の幅を広げたい」と次の展開を語ってくれた。

高知県立美術館では、令和6年に原一男監督の上映会やトークイベントも開催した。

高知で見られる上映会

シネマ・サンライズ

高知映画観賞会でも活動していた吉川修一（よしかわしゅういち）さんによる、毎月上映会（高知県立美術館ホール）。スクリーンでの鑑賞にこだわり、秀作映画を上映。

あかつきシアター

黒潮町の「大方あかつき館」で定期開催されている上映会。レンタルになる前の作品を中心に上映。主催は、四万十市「スタジオウェイブ株式会社」の米津さん。

シネマの食堂

主催は「高知県映画上映団体ネットワーク」。県内各地で自主上映会を開催している団体や映画ファンが集まって行われる上映イベント。

”映写機を携えて地域に映画を！“

使用する映写機は、16mm、35mm、DCP（デジタルシネマパッケージ映写機）。ブルーレイやDVDを素材に、コンパクトなプロジェクターで上映会をすることもある。

地域の文化施設や公民館、学校などに映写機を持ち込んで、移動上映会を開催している「シネマ四国」。こうした「移動映写」の活動は、令和5年だけでも中国・四国地方でなんとおよそ130ヶ所にも上ったというから、一年の半分はどこかで上映会を行っていることになる。そんなシネマ四国で代表を務めている田邊さんは、映画が地域にもたらすさまざまな影響を肌で感じてきた。

「小さな会場では地元の方と一緒に上映の準備をしたり、学校を訪れたら生徒の皆さんと一緒に給食を食べたり。年配の方から『映画を見たのは20年ぶりだよ』と感謝の声を頂いたこともありますね」と、アットホームな思い出は尽きないが、どの移動映写でも変わらないのは、映画をきっかけに人が集まり、そこで朗らかな交流が生まれることだという。「上映会って、地域を元気にしてくれるんです。地元住民の皆さんが生き生きとなって、心身の健康にも良いんじゃないか、と思うくらい。目標は、高知県内の全ての市町村で、年に一回は上映会を開催することですね」。映写機を設置できて暗くなる場所なら、どこでも移動映写はできる。軽やかなフットワークで、シネマ四国は地方に映画を届けてゆく。

シネマ四国代表
田邊（たなべ） 高英（たかひで）さん

昭和42年、広島県生まれ。平成7年「有限会社四国文映社」に入社。その後独立して、平成26年に「シネマ四国」を設立。高知県を拠点に四国地方や岡山県でも移動映写を行う。

映画は地域を元気にする
目指すは県内全ての市町村で
毎年1回以上の上映会を！

映画好きが集まる風土あり！？

高知に引き寄せられる映画人

地域に根付いた映画ファンが多い高知県。映画の題材になりそうな景色や文化もたくさんあることから、映画人が引き寄せられることも。自身も高知に移住された甫木元さんに、お話を聞きました。

高知に活動場所を移したのは新たな表現を求めて

現在、高知県四万十町を拠点に、映画監督、ミュージシャン、小説家として活躍している甫木元空さん。母の実家があった四万十町へ移り住んで、今年で8年目になる。

移住のきっかけは、デビュー作で生まれ育った埼玉県を舞台に「はるねこ」という映画を撮影したこと。移住という決断に、よく「苦労はなかったか？」と聞かれるが、甫木元さんは「環境の変化は自分で望んだこと。これから撮っていきたい映画は、自分が見て聞いて、体験の中で生まれた家族の話を自分のルーツが眠る高知で撮ってみたい、と思ったんです」と話す。

甫木元 空（ほきもと そら）さん

平成4年、埼玉県生まれ。多摩美術大学にて、映画監督・青山真治の下で映画制作を学ぶ。平成28年「はるねこ」でデビュー。同年、高知県四万十町へ移住し、令和4年に「はだかのゆめ」を公開。映画による表現をベースに、音楽など、ジャンルにとらわれないスタイルで表現の世界を拡大している。

はだかのゆめ

地元の肌感覚を探して映画表現を深めていく

高知と映画制作の関係について、「高知はどう撮っても面白いものばかり」と甫木元さん。無防備な自然と、地域に根付く文化や暮らし。それらは、都会にはなかったインスピレーションを与えてくれるという。

中でも、移住後に甫木元さんが大事にするようになったのが、「地元の肌感覚」。「高知のように、独自性が豊かな土地には、そこで暮らしてきた人だけが持つ肌感覚があると思う。内と外での見え方の違いを、映画の中でどう表現するか。それが面白いんです」。二作目の「はだかのゆめ」では、自身の生い立ちや高知で暮らして見えてきたこと、さらに自らの祖父や地域の年配者たちに行った取材で得られた「地域のディープな部分」もシーンに落とし込んでいる。

はだかのゆめ

はるねこ

特設劇場の建設中に撮影された1枚。城西公園の北側にあるステージにスクリーンを設置し、約150席の椅子を並べた。

全国に先駆けて特設劇場で公開された「0.5ミリ」。エグゼクティブ・プロデューサーの奥田瑛二さん、安藤監督、津川雅彦さんが舞台挨拶を行った。

高知らしいカルチャーとたくさんの高知人が背中を押した特設劇場の伝説

平成26年に公開された安藤桃子監督の映画作品「0.5ミリ」。主演は妹の安藤サクラさん、撮影は全て高知県内で行われ、監督自身も高知に移住するきっかけになったという、まさに伝説的な作品だが、その封切りもまた、高知の映画史の記憶に残るものだった。当初は、平成16年に閉館した映画館「高知東映」を「0.5ミリ」のロードショーのために復活させる予定で、高知新聞を始め、地元メディアでも報じられていたが、なんと公開直前になって建物が使用できなくなり、一転して白紙になってしまったのだ。「当時はもう愕然としちゃって。頭を抱えて涙を流したけど、でも、ひとしきりへこんだら、パッとアイディアが浮かんできたんです」。監督の思いが向かったのは、高知市の繁華街に並ぶ屋台や日曜市の風景。「普段は何もないところに、お店や市場が出現して、みんなで賑やかになる。そんな高知に根付いたストリートカルチャーがヒントになったんです」。

この10年を振り返ると全ての要素が「今」につながっていたんだなと思えるんです。

映画監督
安藤 桃子（あんどう ももこ）さん

昭和57年、東京都生まれ。映画館「キネマミュージアム」の代表を務める他、子どもたちが笑顔の未来を描く異業種チーム「わっしょい!」の活動など、高知を拠点に活躍中。

映画館が高知を彩る

「無いなら作ってしまおう！」。高知のカルチャーにヒントを得て生まれた、特設の映画館。多くの人を動かし、多くの人の心にも刻まれた、あの時の出来事を振り返る。

ビジネスではなく、「一緒にやろう！」安藤監督を支えた高知人たち

映画のロケハンで、高知の街をくまなく歩いていた安藤監督。高知城にほど近い城西公園に、野外ステージを備えた広場があることも知っていた。「ここに特設劇場を作れないかな、と。会場はサーカスのテントみたいなものがいい！もしテントさえ張れなかったとしても、パイプ椅子を並べるだけでもいい。だって、一番肝心な映画はあるんだから！」と気持ちを奮い立たせたそう。やがて、公園を管理する高知市と共催が決定。さらに、撮影当時から支援があった「和（かのう）建設」の中澤社長を中心に、たくさんの地元有志が実現に向けて動き始めた。劇場は、土佐市の地元企業「関西仮設」が特許工法「簡易屋根トラス」で設営。スクリーンやシネマシートも、「高知東映」で使われていたものを運び込んだ。そして迎えた公開日。「0.5ミリ」は大盛況で迎えられ、最終的には、当初の予定を上まわる2ヶ月のロングラン上映で、多くの人が特設劇場に足を運んだのだった。

映画を告知するポスターやのぼりが立てられた城西公園周辺。昼夜ともに人の往来が増え、賑やかな雰囲気に包まれていた。

座席数は64席。椅子を取り外してイベント会場にすることもできる。土佐漆喰の壁や高知県産の木を使うなど、館内にはこだわりが随所に。

平成29年から約1年間の期間限定であった映画館「キネマM」の後にできた、常設の映画館「キネマミュージアム」。テーマは「想像と創造」。

文化と生活をつなぐ劇場 高知の皆さんと一緒に「高知の元気の源」に

「何があっても不可能じゃない、高知から世界が変わるって確信できた」と振り返る安藤監督。令和5年には、高知市の商店街「おびさんロード」に、満を持して「キネマミュージアム」をオープンさせた。住民が暮らすマンションの一階にある劇場には、「文化と生活が一体であってほしい」という監督の思いも。文化の拠点として、なにより子どもたちが交流し合い、感性が磨かれる場所になればと話す。「あの時の特設劇場が、今はこうして常設の劇場になっています。キネマミュージアムを高知の街に根付かせていきたい。高知の皆さんと一緒に、高知の元気の源にしていけたら」と、安藤監督は意気込んでいる。

プライムトーク

次世代を担う土佐人たち

高知の風土に育まれた「土佐人」たちは
今日もそれぞれの分野から「土佐の風」を発信
そこに新たな文化を重ねながら…

GUEST

ゴトゴトシネマ 主催

まえだ せいいち

前田 誠一さん

昭和43年、四万十市生まれ。東京の大学で文化人類学を学び、卒業後は出版社や食品会社で勤務。東日本大震災を機に、高知にUターン。高知市土佐山地域発の上映会「ゴトゴトシネマ」を主催している。

地方の街で憧れたカルチャーとの出会い 映画は世界を知る窓口

高知市土佐山地域にある「ゴトゴト石」は、山中の崖の縁に立っている。とても大きな岩なのに、子どもの力でも「ゴトゴト」と簡単に揺れていたそう。しかし、決して崖から落っこちない、不思議な岩だ。高知市でドキュメンタリー映画などを中心に上映活動をしている「ゴトゴトシネマ」は、この土佐山地域から始まった。「結局、ただ自分が好きなものを誰かに勧めることが、大好きなんでしょうね」と、代表を務める前田さんは子どものように笑う。

前田さんの少年時代は、昭和50年代の中村市（現四万十市）の市街地にさかのぼる。「街には『太陽館』という映画館があって、昔の映画文化らしく、上映は2本立ての入れ替えなし（笑）。鑑賞料も安かったし、見たい映画があったら、一日中客席に座って何回も見ていましたね」。地方の街にいながら、映画や音楽の雑誌は欠かさず購入し、最前線のカルチャーを吸収していた前田さん。なにより原体験になったのは、テレビだった。「当時は曜日の名前がついたロードショー番組がたくさんあって、フランス映画と

好きな映画を一緒に楽しみたいから。地元の映画ファンと続けていく上映会。

か、ハリウッドの映画とか、いろんな作品をテレビで見ることが好きでした。ドキュメンタリー番組も大好きで、欧米とは違う未開社会の文化に興味を抱いたり。まさに映像が世界を知る窓口だったんです」。

東日本大震災の後 思いが向かったのは土佐山地域の上映会

やがて高校を卒業後、前田さんは東京の大学へ進学。都会のカルチャーにどっぷりと浸かり、自ら油絵も描いていたそう。社会人になると、オーガニック食品を扱う会社に就職。「食べ物ひとつとっても、ちゃんと考えている人たちは、文化的にも造詣が深くて。結局、ここで食や農の情報を発信する仕事に収まりました」。やがて子育てが始まったこともあり、千葉県の房総半島に家族で移住。家庭菜園を楽しむなど、穏和な田舎暮らしが続いていくかと思っていたが、平成23年、東日本大震災が発生。前田さんは高知へのUターンを決意した。そうして移り住んだのが、高知市の土佐山地域だった。

「高知市で当初働いていた高齢者施設で映画の上映会を開催しようと、16㎜フィルムの映写技師の資格を取ることになったんですね。その講師が西岡恭一（にしおかきょういち）さんという方で、なんと土佐山の桑尾（くわお）のご出身で。「昔は桑尾でも上映会をしよったよ」と教えてくれたんです」。西岡さんが話してくれたのは、真っ暗な山あいの野外上映会の思い出だ。なんとスクリーンと映写機の間に自動車道が通っていたため、時々やってくるバスやトラックの車体に、映画の光が映り込んでいたという。まるで映画「ニュー・シネマ・パラダイス」のワンシーンのような話に、前田さんは土佐山での上映会の復活を考えるようになる。

土佐山にある桑尾公民館。ここで上映会を始めた前田さんは、当時、手芸店で購入した布などで自作したスクリーンを使っていたという。

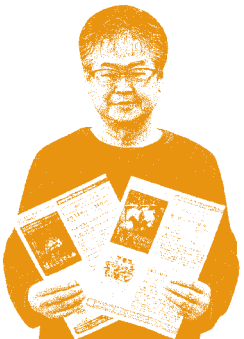
ゴトゴトシネマは高知の映画ファンと一緒に続いていく

「地域を盛り上げよう」という声もあって、平成26年12月、第一回目の「ゴトゴトシネマ」が開催。確信したのは、「自分が本当に見たいと思う映画を企画していきたいし、その面白さを誰かに共感してもらうことが大事」ということだったそう。活動を続けて規模が大きくなるにつれて、平成28年からは、高知市内でミニシアターを備える喫茶店「メフィストフェレス」に会場を移した。以来、ドキュメンタリー映画を中心に、シネコンでは上映されない作品を企画し、地元の映画ファンを喜ばせている。

そんな前田さんが驚いたのは、映画が終わっても観客が席を立たず、アンケートにびっしりと感想を書いてくれることだ。上映する映画を借りる制作や配給の会社からも「高知の映画ファンは感想を書いてくれる人が多い。他県ではありえないくらいですよ」と言われるほど。「ゴトゴトシネマがやっていけるのは、面白がって参加してくれる地元の映画ファンがたくさんいるから。やっぱり高知には、映画好きの風土があるんだと思います」。

上映会を開催した夜、前田さんは観客から寄せられた感想を、一枚一枚じっくりと読む。「それが最高の時間なんですよね」と教えてくれた。

エフエム高知で毎週金曜日に放送中の「プライムトーク」に出演した時の前田さん。前田さんの出演回は、令和6年3月22日、3月29日の2週にわたってオンエア。



土佐 旬と地域と人 ふたたび レシピから

シンプルが一番 高知の家庭で楽しまれる懐かしい味わい

高知を代表する春の山菜のひとつ、「イタドリ」。生は酸味が強く、コリコリとした歯応えが特徴だが、酢物や和え物、煮物など、さまざまな家庭料理として親しまれている。

そんなイタドリを昔から「イタンポ」という愛称で呼んできた梼原（ゆすはら）町で、地元の方々が特に美味しいと勧めるのは、炒め物。茎のシャキシャキとした食感を残しつつ、油を加えることで腹持ちも良くなり、おかずや料理の添え物としても好まれている。二宮さんは、「まだお菓子が無かった当時、梼原では庭先や地元の山、川沿いなどで自生しているイタドリを採ってきては、皮を剥いて塩を付けて、おやつ代わりにかじりよったがよ」と話す。あまりにも身近な存在だったため、これまで注目されてこなかったイタドリだが、ポリフェノールが豊富で栄養価が高く、「世代を問わず愛される味」と、近年、梼原町の特産に。イタドリのお茶やお菓子といった加工品も開発されている。

今回の食材

【イタドリ】

山々に囲まれた高知県で、古くから親しまれてきた山菜のひとつ。痛み止めにもなることから「痛取り」、茎が杖になり虎のような斑点があるから「虎杖」といった呼ばれ方もされているという。

場所	高知県全域
旬	4月中旬〜5月

イタドリのごま油炒め

▶用意するもの（1人前）

イタドリ・・・・・・150g
ごま油・・・・・・大さじ2
砂糖・・・・・・・大さじ2
醤油・・・・・・・大さじ2
昆布だし・・・・・・少々
いりごま・・・・・・適量

2-1

材料

2-2

1

3

4-1

4-2

1. あらかじめ一晩塩抜きしておいたイタドリを、4cmほどに斜め切りする。
2. 中火で熱したフライパンにごま油を適量加える。1のイタドリをフライパンへ移し、ごま油が全体に行き渡るように軽く炒める。
3. 油が回ったイタドリに、砂糖、醤油、昆布だしを加え、混ぜ合わせながら炒める。
4. 仕上げにもう一度ごま油を回しかける。いりごまを適量加えてさっと炒め、お皿に盛り付けたら完成！

おたからレシピ ひとくちメモ

昔は茎の部分だけ食べられていましたが、栄養価が高い葉の部分を捨ててしまうのは惜しいということで、椨原町ではイタドリの葉を使った「イタンポ茶」や、乾燥させて粉末にした葉を麺に練り込んだ「イタンポうどん」としても美味しく食べられているんですよ。

まだまだある！

【メヒカリの唐揚げ】

メヒカリとは、身は白身で淡白でありながら、程よい脂がありやわらかい小魚。素揚げや唐揚げにして、お好みでポン酢を付けたり、南蛮漬にするのもおすすめ。

【ぜんまいの白和え】

春の山菜であるぜんまいは、この時期にたくさん収穫して、一年間保存して使えるようにすることがある。煮たり茹でたりが多いが、白和えにして皿鉢（さわち）にも入れられている。

【レシピ案内人】
椨原町のお母さん 二宮 洋子さん

元々大阪で働いていた二宮さん。定年後、地元である椨原町に帰り、病院給食を作る職員として働く。その後、椨原町の和田城内で喫茶を営み、同町にある「福祉の館」にて炊事も担当。元々料理好きだったこともあり、「雲のうえ食堂」でも地域のお母さんたちと共に地元の味を届けている。

土佐の業（ワザ）

土佐に息づくさまざまな職人ワザ。伝統の傍らに、常に新しい展開があることも、土佐らしい特徴の一つだ。今回は、映像制作をテーマに、土佐の業を探訪！

飛び込んだ映画制作の世界で広がった人生

四万十市を舞台にした映画「あらうんど四万十～カールニ・カーラン～」で、プロデューサーを務めた米津さん。それまで地域活性のための映画上映会の経験はあったものの、制作に携わるのは初めてだったそう。それでも企画の立ち上げから予算集め、進行管理、配給に至るまで、何でもこなした。「なんせ素人でしたから分からないことだらけで。今思えば「知らない」からこそがむしゃらに進めたことは多いと思います」と振り返る。その後、映画「サムライせんせい」の配給も担い、現在は映画でつながった縁を生かして、レンタルになる前の作品を上映する「あかつきシアター」を、黒潮町の「大方あかつき館」で定期開催している。「新しいことにチャレンジして生まれた新しい可能性をつなげて、地域に貢献していきたい」と話してくれた。

四万十市出身の松田大佑さんが監督、土佐市出身の俳優・西村雄正さんらが出演した映画は、「四万十映画祭」の先行上映後、台湾やメキシコなど60都市100ヶ所で上映された。

スタジオウェイブ株式会社

米津（よねづ） 太（ふとし）さん

昭和44年、黒潮町生まれ。「スタジオウェイブ株式会社」の代表を務め、映像制作関連や動画配給・宣伝、映画上映会の企画、運営などを行っている。

令和3年に土佐市で行われた「ドラゴン映画祭」の時に撮影された1枚。上映後にはトークショーも開催された。

カンヌ国際映画祭の後、台湾の配給会社から契約したいというメールがきて歓喜したという。その後、高知や東京でも上映した。

平成27年の5月にはカンヌ国際映画祭で正式上映され、高い評価を受けた「あらうんど四万十」。一緒に写るのは西村雄正さんと松田大佑監督。

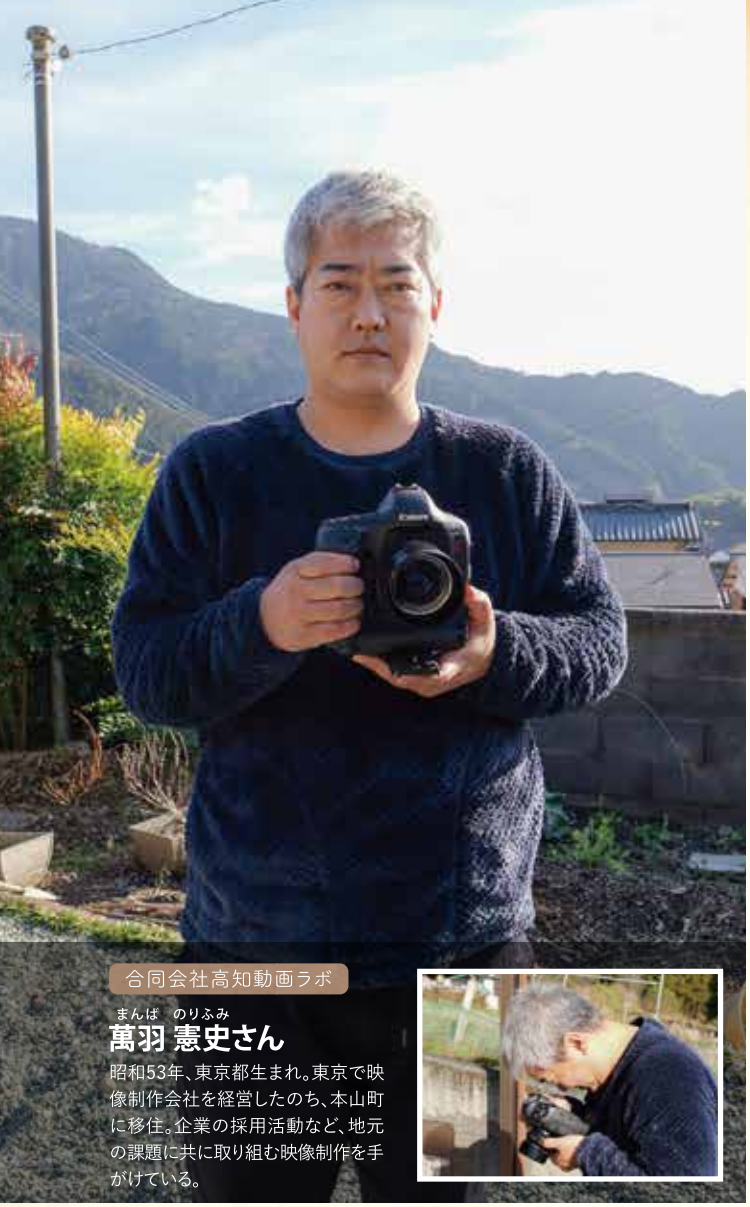
米津さんが実行委員長を務める「四万十映画祭」。あらうんど四万十は、もともとこちらで上映するために作られた。

日々脈々

今回のテーマ
映像制作

心を映し出す映像で高知の人々を描く

中学生の頃、アメリカの青春映画の金字塔「いまを生きる」を見たことをきっかけに、映画の世界に魅了された萬羽さん。「映画には、それまで知らなかった考え方やものの見方が広がっているんですよね」。やがて、大学卒業後に飛び込んだ映画業界で培ったのは、「心を見て、心を映すこと」の大切さ。目には見えない心の動きを、映像の中に醸し出すことが、萬羽さんのモットーだ。映画やドラマの監督を務めるなど、映画業界で活躍していたが、平成25年、子育てのため、山あいの自然豊かな高知県本山町に家族で移住。現在は、動画を使った地元の企業や学校の広報活動を支援している。萬羽さんが手がける映像には、どれも心が宿っている。



合同会社高知動画ラボ

萬羽（まんば） 憲史（のりふみ）さん

昭和53年、東京都生まれ。東京で映像制作会社を経営したのち、本山町に移住。企業の採用活動など、地元の課題に共に取り組む映像制作を手がけている。

およそ10年にわたって使い続けている愛用のカメラ。フィルムのような淡い質感を演出できるため、人の心を写す映像に欠かせないという。萬羽さんの相棒のような存在だ。

編集作業も自ら行う。現在の事業の中心であるリクルート動画では、採用する企業側だけでなく、動画を見る求職者の気持ちも大事にしている。

土佐町のPR動画「八つの恋の歌」で地域発デジタルコンテンツ総務大臣奨励賞を受賞。テーマや台本など、土佐町中学校の子どもたちが主体となれるよう取り組んだ。

現場を共にしてきた仕事仲間たち。頼れる仲間の存在は、「難しい課題に直面しても必ず乗り越えられる」という自信につながる。

映画づくりに欠かせないのが心情ライン。見る人の心に届けるために、演出・撮影・編集による仕掛けを積み重ねていく。

ちっくと寄っていかんかえ～

うちの商店街

今回の商店街

ゑびす商店街

高知市から車でおよそ30分にある「ゑびす商店街」は、昭和レトロな雰囲気を生かしたイベントが名物。
古き良き時代の懐かしさを味わえると、全国から人が集まっている。

土佐ろっこん
安田 周平（やすだ しゅうへい）さん

京都で長年、料理人として修行を重ねたという安田さん。地元らしい旬の味わいを楽しめる創作料理に、多くの地元客が通う。手に持つのは、看板メニューの「赤こんにゃく」。

株式会社サント企画
上島 陽子（かみじま ようこ）さん

「子どもたちと町をもっと元気にしたい！」という思いで、3代目の店主を務める上島さん。フラワーショップを中心に、子どもたちの学習支援やピアノ教室も行っている。

おもちゃのミッキー
比与森 光俊（ひよもり みつとし）さん

開業は昭和59年。当時はゲーム機やプラモデルなどを販売していたが、現在は昔懐かしい駄菓子が並んでいる。集まってくる地域の子どもたちを温かく見守り続けている。

ふらっと中町
寺村 勉（てらむら つとむ）さん

もともとはスーパーマーケットだった空き店舗を活用して誕生した、地域のコミュニティ施設。チャレンジショップやイベントスペースがあり、地元住民や観光客の交流の場となっている。

街の一言

昭和のヒーローも登場！ ゑびす昭和横丁に いらっしゃい

20年にわたって開催されている「ゑびす昭和横丁」は、例年9月に開催されます。見ものはなんと言っても、月光仮面！　ライバルのどくろ仮面と共に、子どもたちをカートに乗せて、ゑびす商店街の路地裏や昭和レトロな面影を残すスポットを探検！語り部として、商店街の魅力を伝えています。ぜひいらっしゃい♪

ゑびす商店街の月光仮面

商店街MAP

ふらっと中町には、昭和の雰囲気を感じられる看板も展示。チャレンジショップが出店していることもあるため、街歩きの休憩に気軽に立ち寄ってみよう。

昭和にタイムスリップ!? レトロな街並みを楽しむ 元気な商店街

香美市（かみし）土佐山田町の「ゑびす商店街」が興ったのは、高度経済成長期の時代。高知県の北東部にあたる香北・物部地域に物資を運ぶための交通の要衝として発展してきた。商店街の中心地にある「土佐山田駅」の駅前には、当時、映画館もあったという。多くの人々が行き交う中、夕方になると音楽隊がトランペットを鳴らして上映の時刻を知らせる。するとそれが合図になって、商店街の人々はその日の仕事を終わらせ、映画を楽しんだのだとか。それからバイパス路となる国道の整備が進むにつれ、商店街の景色も徐々に変わっていったが、「商店街が一丸となって町を元気にしたい！」と、平成15年に「ゑびす昭和横丁」を企画。レトロな看板や家電を懐かしむ見せ物やハイカラ食堂、四国内外からクラシックカーが集う催しを行い、当時のような賑わいが戻ってきたそう。ゑびす昭和横丁実行委員長、寺村勉さんは「いろいろな世代が交流することで、元気な町を大切にしていきたい」と語ってくれた。

問い合わせ　えびす街協同組合事務局（寺村葬儀社）　TEL：0887-53-5151

つないでつむいで 県史編さん室

高知県史（自治体史）とは？

高知県について伝え残されたさまざまな資料を調査し、本県の歴史を詳細に記したもの。郷土の歴史を知る、大切な手がかりだ。

旧土佐山村（高知市）資料所在調査の様子。筒井委員（近代部会）。

文書の内容について説明する編さん室職員。

津野町芳生野での暮らしや祭礼について語る吉門豊子さん。

編さん室職員も調査活動を実施

新たな高知県史の事業では、時代や分野ごとの各専門部会委員が精力的に資料調査を進めているが、編さん室職員もさまざまな調査に従事している。今回はそのうち「予備調査」と「資料所在調査」をご紹介したい。

予備調査は、専門部会による調査が予定される地域に赴き、資料の保管状況の確認、調査先の担当者、資料所蔵者、聞き書き調査の話者との調整などを行う。例えば令和5年12月には、津野町で戦国時代の文書の予備調査を実施。現地で所蔵者の吉門豊子さんから史料確認と聞き取りを行った。70年近く津野町で暮らす吉門さんからは、文書のみならず、山の生活や神社の祭礼など、現代史や民俗に関する話もたくさん聞かせていただいた。得られた情報は関係部会の委員に共有され、新たな調査につなげていく。

県内に所在する資料の情報を収集

委員や職員が資料調査を実施するとき、まずは各々の資料について、誰が所有し、どこで保管され、どのような状態であるか、包括的な所在情報が欠かせない。これを行うのが資料所在調査だ。前回の県史やそれぞれの市町村史で確認・利用された資料を始め、各地の資料館や図書館、学校、団体・個人が所蔵している資料などを対象に、すべての市町村を訪問して、関係者への聞き取りや現況確認などにより、全体状況の把握を進めている。

例えば、令和6年1月の旧土佐山村(高知市)の調査では、旧役場庁舎などの行政資料を調査。同村で盛んであった、戦後の社会教育に関する資料が確認できた。

残念ながら過去に確認された資料が今は所在不明であったり破棄された事例も多いが、新たな発見も続いている。所在調査には、各地域の貴重な歴史資料を将来に伝え残すための、基礎情報の役割も期待される。

第八回　歴史民俗文化の里　権谷せせらぎ交流館

史料が語るもの語

四万十市西土佐地区の「旧権谷(ごんだに)小学校」の校舎を活用した「権谷せせらぎ交流館」。ここでは、民具などの生活資料を始め、戦時中の満州移民と引揚げ、そして「慰霊の旅」などの記録が受け継がれている。

令和5年8月現代部会
体験者の方への聞き取り調査

昭和二十一年十月十六日
更生会規約　江川崎村海外引揚民更生会

故郷に帰ってきた引揚者と戦後のくらし

戦時下の国策として知られる満州移民は、「分村」という集団移住の形で進められたことが多く、敗戦時の混乱により、多くの人たちが亡くなった。幸い故郷に帰ることができた引揚者も、戦後のくらしは苦難に満ちており、現代部会では体験者の方に聞き取りを行っている。

権谷せせらぎ交流館には多くの史料が保存・展示されており、写真の史料は、引揚者が相互扶助のために自ら組織した引揚民更生会の規約である。引揚者の連絡、就職・就農あっせん、役場への陳情など引揚者の生活再建にとって大きな役割を担っていたことが読み取れる。

戦争や移民は地域に何をもたらしたのか、史料と対話しつつ考えていきたい。

高知県の歴史に触れる

県史特集

地域の歴史が記録される映画

今回のテーマは、暮らしを映像に記録すること。
いの町吾北地区の文化を継承するため
奔走を続けている田岡重雄さんに
村が映画の舞台になった話題を聞いた。

田岡さんら「上東(じょうとう)を愛する会」の活動拠点である「いの町立上東小学校（平成13年3月休校）」の講堂。ドラム缶楽器スティールパンや健康体操などを楽しみながら、集落の維持、地域活性化に取り組んでいる。

一冊の自治体の記録集から村が映画の舞台に伝承や風習のちから

地域の歴史を後世に伝える一冊の記録集が、なんとその地域を映画の舞台にしてしまうきっかけになった。そんな驚きの展開があったのは、今年で合併二十年を迎えるいの町吾北（ごほく）地区。かつての旧吾北村の暮らしを描いた記録集「ごほく 樹と水物語」が生んだドラマだ。今回お話を伺った田岡重雄さんは、「ごほく 樹と水物語」の発行に尽力した人物。長年にわたっていの町で暮らし、吾北地区の文化を継承する活動を続けている。

「当時は、散らばっていた吾北村の伝聞をしっかり見直して、地元の魅力を再認識する一冊を作りたかった」と田岡さん。村史を読み返し、一年以上の期間をかけ、先輩方から伝承や風習をお聞きし、四季の自然や住民の写真と共に編さん。村に残されていた物語が、生き生きと伝わってくる本に仕上がり、平成４年に発行された。これは、田岡さんの現在の活動のルーツにもなっているという。「それから間もなくして、絵本作家の田島征三さんから、『本を見たよ』と連絡があったんです。本当にびっくりしましたね」。

村の暮らしを映像として記録し伝えていくこと

折しも、自身の自伝的なエッセイを原作に、映画化の話を進めていた田島征三さん。撮影のロケ地探しで、この本をきっかけに田岡さんとつながることができたのだった。田岡さんは地元のコーディネーターとして撮影に協力。撮影陣と共に地域を回り、村の情景を映像に収めていったという。そうして平成8年、吾北村を舞台にした映画「絵の中のぼくの村」が公開。「後世に残り続ける映画作品に、村の暮らしを記録できたことが嬉しかった」と田岡さん。実はその中には、もともと原作にはなかったものの、田岡さんの提案によって追加された、吾北地区の伝統的な手仕事、「楮（こうぞ）の蒸し剥ぎ」のシーンも。映画は、国内外で高い評価を得たのだった。

休校になった体育館や校長室には、映画の記念品や郷土関連の資料などが大切に保管されている。

ドキュメンタリー映画と活動の継承と村の暮らしを後世に

その後田岡さんら住民と土佐和紙手すき職人等が連携し、楮畑の共同作業を開始。かつて高知の山間地は、土佐和紙に不可欠な楮の全国的産地だったものの、現在は後継者が激減するなど深刻な課題に直面している。その状況は過疎集落の縮図とも言える。これらを題材にしたドキュメンタリー映画「明日をへぐる」（今井友樹監督・シグロ作品）が令和3年に制作され、田岡さんは企画段階から参画。親や祖父母世代からの山里の暮らし、笑顔、吾北の原風景が映画に収められた。今後も「カジへぐり」などの集いを続け、「方言（言葉）や文化を記録したい」「蓄積したつながりを楽しみ、集落を維持したい」と話す。吾北地区でつむがれてきた暮らしを伝えるべく、奔走を続けている。

昔ながらの「楮」（吾北では、カジ・カジクサと呼ぶ）作業を取り入れた吾北上東地区の「集い」の活動。土佐和紙の原料になる黒皮をへぐった白皮は、学校の敷地内で乾燥させている。

村の歴史はもちろん、暮らしや文化をおさめた「ごほく樹と水物語」。

昭和36年、いの町生まれ。元いの町職員。高知県立歴史民俗資料館調査協力員。現在は生まれ育った吾北上東地区で「上東を愛する会」の副会長として、吾北の暮らしと文化を伝え残していく活動に尽力する。

田岡 重雄（たおかしげお）さん

イラスト：ondesign

第11話

伝え継がれる
土佐ものがたり

昔々にあったとさ♪

「巡査がうまい」

とんとむかし……というても明治のころの話よ。
ふかいふかい山のおくの里に、まだ町を見たことのない親子がおったそうな。
ある日のこと、その親子が町へ買い物に行くことになったと。
ほんで、おっかあに弁当をこしらえて貰うて、二人は山をこえ谷をこえ丸木橋をわたって、三日三晩も歩いたいうきに（※1）、げにたいちゃ（※2）山おくの人じゃったもんよのう。
町へついたら息子は、こじゃんと（※3）たまげた（※4）声で、
「おとやんよ、えらい広いが、ここも日本かよ」
いうて聞いたら、おっとうのいうには、
「阿呆、日本はまだこれの倍ばあ、ありゃあや」
いうたと。
町じゃ、初めて見る珍しいもんばっかりじゃけん、二人ともきょろきょろしながら、歩きまわりよったそうな。
ほいたら餅屋があって、おいしそうな餅がおいちゃある（※5）のを見て、息子が、
「おとやんよ、ありゃなんぜ」
「ありゃ餅じゃ。ひとつ買うちゃらあよ」
おっとうは、息子に餅を買うちゃったと。
ほんで息子は餅をたべたべ、おっとうは町なみを見よりながら歩きよったそうじゃが、ぼっちり（※6）警察の前をとおりよった時じゃと。
息子はじぶんが持っちょる餅のあんこを見ながら、
「おとやん、このまんなかの黒いもんはなんじゃろうねえ」
と聞いたと。そのときおっとうは警察署の前に出ちょる黒服の巡査を見よったもんよ。
「そりゃあ、巡査よ」
と答えたと。息子は、
「そいたらのう、このふちの白いもんは何ぜ」
「そりゃあ、警察よ」
おっとうがこういうと息子は、
「ああ、そうかえ、おとやん。ふちの警察よりもなかの巡査の方がうまいのう」
というたそうな。
むかしまっこう　さるまっこう
さるのつべは　ぎんがりこ

出典 土佐むかし話　**著者** 市原麟一郎　**絵** 種田英幸

天衣無縫に生きた土佐おどけ者の生き様に惹かれ「近代土佐における、おどけ者の探求」を行い、数々の民話を発行。そんな市原麟一郎氏が惹かれたおどけ者は「いごっそう」「どくれ」「ひょうげ」「そそくり」「かんりゃく人」「のかな奴」「おっこうがり」「てんごのかぁ」「ごくどうもん」など。

（※1）歩いたいうきに…歩いたというから　（※2）げにたいちゃ…本当に　（※3）こじゃんと…とても　（※4）たまげた…驚いた　（※5）おいちゃある…置いてある　（※6）ぼっちり…ちょうど

応募締切
令和6年6月20日

とさぶしからの贈り物

1 大心劇場
ペア鑑賞券

1組（2名）様

映画はもちろん、映画館の昭和レトロな雰囲気も楽しめる大心劇場のペア鑑賞券。ぜひ応募してみて！

2 集落活動センターゆすはら東
ゆすはらイタンポ茶 ティーパック

3名様

椿原町の「イタンポ」（イタドリ）を使ったお茶のティーパック。香りが良く、クセのない味で身体にも優しい。

3 シネマ四国
「とさぴくシアター」の映画鑑賞券

ペア5組様

「シネマ四国」の3階にある、座席数20席のミニシアター。上映スケジュールはシネマ四国HPでチェック。

4 キネマミュージアム
ペア鑑賞券、オリジナルポストカード、ステッカーのセット

3組様

おびさんロードにある映画館「キネマミュージアム」のペア鑑賞券と、オリジナルポストカードとステッカーをセットにしてプレゼント！

クイズとアンケートに答えて読者プレゼントに応募しよう！

クイズ 昭和30年に高知市で創業した老舗映画館は？

❶スマホから右のQRコードを読み込んでwebサイトにアクセス
❷応募フォームより、必要事項を明記し、読者プレゼントに応募する

たくさんの応募お待ちしています。

※読者プレゼントの応募は「とさぶしwebサイト」もしくは、官製ハガキから応募できます。官製ハガキで応募される場合はお名前・発送先のご住所・お電話番号・ご希望のプレゼント番号・クイズの解答・とさぶしを読んでのご意見やご感想、今後見てみたい特集テーマをご記入の上、下記の宛先まで締切日（令和6年6月20日）必着でお送りください。　〒781-0081 高知市北川添10-15 株式会社ほっとこうち

●読者プレゼントの応募は、1人1回とさせていただきます。 ●プレゼントの発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。 ●いただきました個人情報はプレゼントの発送にのみ使用します。

A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI
TOSABUSHI
とさぶし

Web リニューアル! 見てちや!

https://tosabushi.com

発行
高知県文化生活スポーツ部文化国際課

〒780-8570 高知市丸ノ内1丁目2番20号（本庁舎5階）
Tel 088-823-9793　Fax 088-823-9296
E-mail 140201@ken.pref.kochi.lg.jp

発行日：令和6年3月31日（季刊）

企画　とさぶし編集委員会
制作　ほっとこうち

バックナンバーの入手方法

お近くに配布先がない場合は、送付を希望されるバックナンバーの号数と部数、送付先、氏名、連絡先（電話番号）をご記入のうえ、送料分の切手をお送りください。受取次第、発送をいたします。
※連絡先は、バックナンバーの在庫がない場合や切手の過不足があった場合などに使用します。

【送料】

1冊　140円
2冊　180円
3冊　215円
4・5冊　310円
6冊以上の場合は、一度ご連絡ください。

お問い合わせ・送付先は、
高知県文化生活スポーツ部文化国際課（上記）まで。

Facebook、LINEでも情報配信中！

Facebook　LINE

とさぶしと友達になろう！

特集

P02 高知人がつむぐ映画愛
P07 高知で撮られた名画
P08 上映会で高知に映画を！
P11 高知に引き寄せられる映画人
P12 映画館が高知を彩る

連載

P14 プライムトーク【前田誠一さん】
P16 土佐おたからレシピ【イタドリのごま油炒め】
P18 土佐の業 日々脈々【映像制作】
P20 うちの商店街【ゑびす商店街】
P22 つないでつむいで 県史編さん室
P24 地域の歴史が記録される映画
P26 昔々にあったとさ

表紙協力／キネマミュージアム